

感染症発生動向調査事業における宮崎県の患者発生状況 －2019年（令和元年）－

古澤優 馬見塚理奈²⁾ 三浦美穂¹⁾
吉野修司¹⁾ 杉本貴之¹⁾ 藤崎淳一郎

Summary of the 2019 Annual Report According to the National Epidemiological Surveillance of Infectious Diseases in Miyazaki Prefecture

Furusawa Yu, Mamizuka Rina, Miura Miho,
Yoshino Shuji, Sugimoto Takayuki, Fujisaki Junichiro

要旨

2019年に県内では全数把握対象87疾患中、29疾患が報告された。疾患別では百日咳（304例）、結核（194例）、つつが虫病（43例）の報告が多かった。全国的に年々増加傾向である梅毒は、県内でも同様に増加し、過去最も多い報告数となった。また、2009年以来となる腸チフス、県内初となるクリプトスポリジウム症が各1例ずつ報告された。

定点把握対象疾患のうちインフルエンザ及び小児科対象疾患については、報告総数が前年及び例年の約0.8倍、全国の約1.3倍であった。眼科定点対象疾患の報告総数は、前年及び例年の約0.7倍、全国の約3.0倍であった。基幹定点対象疾患の報告総数は、前年の約0.3倍、例年及び全国の約0.2倍であった。月報告対象疾患の性感染症の報告総数は、前年の1.1倍、例年の約0.9倍、全国の約0.6倍であった。薬剤耐性菌感染症の報告総数は、前年の約0.9倍、例年の約0.8倍、全国の約0.7倍であった。

キーワード：感染症発生動向調査事業、宮崎県、全数把握、定点把握

はじめに

当研究所では、1994年（平成6年）から感染症発生動向調査事業に基づいて感染症情報の収集と解析を行ってきた。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民に情報提供し、感染症の発生及び拡大の防止並びに公衆衛生の向上に努めている。

今回、本県における2019年（令和元年）の患者発生状況をまとめたので報告する。

調査方法

1 対象疾患及び定点医療機関

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」で定められた115疾患を調査対象

とした。

指定届出医療機関（以下「定点」という。）は、感染症発生動向調査事業実施要綱¹⁾に基づき選定した（表1）。

表1 保健所別指定届出医療機関（定点数）

保健所名	定点種別				
	インフルエンザ	小児科	眼科	基幹	STD
宮崎市	16	10	3	1	4
都城	10	6	2	1	2
延岡	7	4	1	1	2
日南	5	3		1	1
小林	5	3		1	1
高鍋	6	4		1	2
高千穂	2	1			
日向	6	4		1	1
中央	2	1			
計	59	36	6	7	13

2 調査期間

全数把握対象疾患については2019年1月1日から12月31日まで、定点把握対象疾患については2019年1週から52週まで、インフルエンザについては2019/2020年シーズンの2019年41週から2020年14週までをそれぞれ調査期間とし、いずれの疾患も診断日をもとに集計した。

結果

1 全数把握対象疾患の発生状況

1) 一類感染症

報告はなかった。

2) 二類感染症

結核194例が報告された。

a) 結核 Tuberculosis

報告数は194例で、前年(163例)の約1.2倍であった。病型は、肺結核が70例、その他の結核(結核性胸膜炎、結核性心外膜、結核性心膜炎、結核性髄膜炎、腸結核、肺外結核、頸部結核性リンパ節炎、粟状結核、右胸膜炎、結核性リンパ節炎)が25例、肺結核及びその他の結核(粟状結核、気管支結核、結核性髄膜炎)が5例、疑似症患者が5例並びに無症状病原体保有者が89例であった。宮崎市(82例)、高鍋(50例)、延岡(17例)保健所からの報告が多く、性別では男性が80例、女性が114例であった。年齢別では70歳以上が95例と全体の約半数を占めた。

3) 三類感染症

腸管出血性大腸菌感染症42例と腸チフス1例が報告された。

a) 腸管出血性大腸菌感染症

Enterohemorrhagic *Escherichia coli* infection

報告数は42例で、前年(39例)の約1.1倍であった。患者が26例(うちHUS発症:2例(1例はO157, O121, 1例は血清型不明)), 無症状病原体保有者が16例であった。O血清型別では、O111が26例, O157, O26が各5例, O115が2例, O91, O121, O128, O165及び不明が各1例であった(表2)。都城(29例)、宮崎市(5例)、

高鍋(4例)、日向(2例)延岡及び中央(各1例)保健所からの報告であった。

年齢別では1~4歳が12例と多かった。

発生月別では、7月が全体の約7割を占めた。

表2 O血清型別報告数

O血清型	報告数
O111	26
O157	5
O26	5
O115	2
O91, O121, O128, O165	各1
不明	1
計	43

※ 同一人から2種検出が1人

b) 腸チフス Typhoid fever

報告数は1例で、宮崎市保健所からの報告であった。患者はインドネシアへの渡航歴があり、性別は女性、年齢は20歳代であった。主な症状として高熱、比較的徐脈、脾腫、便秘がみられた。

4) 四類感染症

E型肝炎1例, A型肝炎3例, 重症熱性血小板減少症候群(SFTS)8例, チクングニア熱1例, つつが虫病43例, デング熱3例, 日本紅斑熱8例及びレジオネラ症8例が報告された。

a) E型肝炎 Hepatitis E

報告数は1例で、宮崎市保健所からの報告であった。年齢は70歳代で、主な症状として、全身倦怠感、黄疸、肝機能異常がみられた。

b) A型肝炎 Hepatitis A

報告数は3例で、宮崎市(2例)及び日南(1例)保健所からの報告であった。年齢別では30歳代, 70歳代, 90歳代が各1例であった。主な症状として全身倦怠感、発熱、食欲不振、黄疸、肝機能異常等がみられた。遺伝子型はいずれも不明であった。推定感染経路は経口感染が1例, 不明が2例であった。

c) 重症熱性血小板減少症候群

SFTS (Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome)

報告数は8例で、宮崎市(4例)、延岡及び日南(各2例)保健所からの報告であった。性別は男

性が7例、女性が1例、年齢別では60歳代以上が全体の約9割を占めた。主な症状として発熱、白血球・血小板減少、全身倦怠感、下痢等がみられた。患者の発症時期は、2～9月で特に6月に多かった。

d) チクングニア熱 Chikungunya fever

報告数は1例で、宮崎市保健所からの報告であった。患者はフィリピンへの渡航歴があり、性別は男性、年齢は20歳代であった。主な症状として発熱、関節痛、発疹、全身倦怠感等がみられた。本県では、2016年以来3例目の報告であった。

e) つつが虫病

Scrub typhus (Tsutsugamushi disease)

報告数は43例で前年(60例)の約0.7倍と減少した。患者発生時期は例年どおり冬季で、ほぼ11月(17例)、12月(21例)の報告が占めた。宮崎市(12例)、都城、小林(各11例)保健所からの報告が多く、性別は男性が21例、女性が22例、年齢別では60歳以上が約8割を占めた。主な症状として頭痛、発熱、刺し口、リンパ節腫脹、発疹等がみられた。

f) デング熱 Dengue fever

報告数は3例で、宮崎市(2例)、都城(1例)保健所からの報告であった。患者は日本国籍で海外渡航歴ありが1例、外国籍が2例であった。性別は男性が1例、女性が2例、年齢は20歳代が2例、40歳代が1例であった。主な症状として2日以上続く発熱、発疹、血小板減少、白血球減少等がみられた。

g) 日本紅斑熱 Japanese spotted fever

報告数は8例で、患者の発生時期は5月から11月であった。宮崎市(5例)、日南(2例)、都城(1例)保健所からの報告であった。性別は男性が2例、女性が6例、年齢別では70歳代が5例と多く、次いで50歳代、60歳代及び80歳代が各1例であった。主な症状として発熱、頭痛、刺し口、発疹、肝機能異常、DICがみられた。

h) レジオネラ症 Legionellosis

報告数は8例で、宮崎市(5例)、延岡、小林及び高鍋(各1例)保健所からの報告であった。病型は肺炎型が6例、ポンティアック熱型が2例であった。性別は男性が7例、女性が1例で、年

齢別では60歳代、80歳代が各3例、70歳代が2例であった。主な症状として発熱、咳嗽、呼吸困難、意識障害、肺炎等がみられた。

5) 五類感染症

アメーバ赤痢4例、ウイルス性肝炎4例、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症14例、急性弛緩性麻痺1例、急性脳炎3例、クリプトスポリジウム1例、クロイツフェルト・ヤコブ病1例、劇症型溶血性レンサ球菌感染症11例、後天性免疫不全症候群5例、侵襲性インフルエンザ菌感染症1例、侵襲性肺炎球菌感染症12例、水痘(入院例)1例、梅毒23例、播種性クリプトコックス症2例、破傷風3例、百日咳304例、風しん2例及び麻しん1例が報告された。

a) アメーバ赤痢 Amebic dysentery

報告数は4例で、病型は腸管アメーバ症が3例、腸管外アメーバ症が1例で、延岡(2例)、宮崎市及び高鍋(各1例)保健所からの報告であった。性別は男性が3例、女性が1例で、年齢別では40歳代が2例、50歳代及び70歳代が各1例であった。主な症状として粘血便、しぶり腹、発熱、肝腫大等がみられた。

b) ウイルス性肝炎 Viral hepatitis

報告数は4例で、原因病原体はいずれもB型肝炎ウイルスで、宮崎市保健所からの報告であった。性別はいずれも男性で、年齢別では20歳代が2例、30歳代、40歳代が各1例であった。主な症状として全身倦怠感、発熱、肝機能異常、黄疸等がみられた。

c) カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症

Carbapenem-Resistant *Enterobacteriaceae*

報告数は14例であった。原因病原体は *Enterobacter cloacae* が7例、 *Klebsiella(Enterobacter) aerogenes* が6例、 *Citrobacter freundii* が1例、 *Enterobacter asburiae* が1例で(同一人から2種検出が1例あり)、宮崎市(6例)、都城(5例)、延岡(3例)保健所からの報告であった。年齢別では70歳代が5例と多く、次いで60歳代が3例、80歳代が2例、10歳代、30歳代、50歳代、90歳代が各1例で、主な症状は尿路感染症、肺炎、腹膜炎、菌

血症，敗血症がみられた。

d) 急性弛緩性麻痺 *Acute flaccid paralysis*

報告数は 1 例で，原因病原体は不明であった。都城保健所からの報告であった。年齢は 10 歳代で，主な症状として弛緩性麻痺（左右下肢）がみられた。

e) 急性脳炎 *Acute encephalitis*

報告数は 3 例で，原因病原体は腸管出血性大腸菌，ヒトヘルペスウイルス，コクサッキーウイルス A 6 型が各 1 例であった。いずれも宮崎市からの報告で，年齢別では 0～4 歳が 2 例，50 歳代が 1 例であった。主な症状として発熱，痙攣，意識障害等がみられた。

f) クリプトスポリジウム症 *Cryptosporidiosis*

報告数は 1 例で，宮崎市保健所からの報告であった。性別は男性で，20 歳代であった。主な症状として腹痛，下痢，発熱がみられた。

g) クロイツフェルト・ヤコブ病

Creutzfeldt-Jakob disease

報告数は 1 例で，病型は古典型クロイツフェルト・ヤコブ病で，宮崎市保健所からの報告であった。性別は男性で，年齢は 80 歳代であった。主な症状として進行性認知症，ミオクローヌス，錐体路症状，視覚異常，精神・知能障害，異常感覚がみられた。

h) 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

Severe invasive streptococcal infections

報告数は 11 例で，血清群は G 群が 4 例で，A 群，B 群が各 3 例，不明が 1 例であった。宮崎市（9 例），都城及び延岡（各 1 例）保健所からの報告であった。年齢別では 70 歳代が 4 例，60 歳代が 3 例，80 歳代が 2 例，40 歳代及び 50 歳代が各 1 例であった。主な症状としてショック，肝不全，腎不全，DIC，軟部組織炎，中枢神経症状等がみられた。

i) 後天性免疫不全症候群

Acquired immunodeficiency syndrome

報告数は 5 例であった。病型は AIDS が 2 例（指標疾患：カンジダ症及びサイトメガロウイルス感染症が各 1 例），無症候性キャリアが 3 例であった。宮崎市（4 例），都城（1 例）保健所からの報告で，性別はいずれも男性であった。年齢別では

30 歳代が 3 例で，20 歳代及び 50 歳代が各 1 例で，感染経路は異性間性的接触 1 例，同性間性的接触 2 例，不明 2 例であった。

j) 侵襲性インフルエンザ菌感染症

Invasive Haemophilus influenza infection

報告数は 1 例で，宮崎市保健所からの報告であった。患者は 0～4 歳で，主な症状として菌血症がみられた。

k) 侵襲性肺炎球菌感染症

Invasive pneumococcal infection

報告数は 12 例で，宮崎市（7 例），都城（3 例），延岡，日向（各 1 例）保健所からの報告であった。性別は男性が 9 例，女性が 3 例で，年齢別では 60 歳代以上が全体の約 8 割を占めた。主な症状として発熱，全身倦怠感，意識障害，肺炎，菌血症等がみられた。ワクチン接種歴は接種無しが 4 例，有りが 2 例，不明が 6 例であった。

l) 水痘（入院例） *Chickenpox*

報告数は 1 例で，病型は検査診断例で，日南保健所からの報告であった。年齢は 80 歳代で，主な症状として発熱，発疹がみられた。ワクチン接種歴は不明であった。

m) 梅毒 *Syphilis*

報告数は 23 例で，病型は先天梅毒 2 例，早期顕症 I 期が 4 例，早期顕症 II 期が 13 例，無症状病原体保有者が 4 例であった。宮崎市（9 例），日向（6 例），都城（4 例），延岡，日南，小林及び高千穂（各 1 例）保健所からの報告であった。性別は男性が 16 例，女性が 7 例，年齢別では 20 歳代が 8 例，30 歳代が 6 例，0～4 歳，40 歳代及び 50 歳代が各 2 例，60 歳代，70 歳代及び 80 歳代が各 1 例であった。感染経路は異性間性的接触が 14 例，同性間性的接触，母子感染が各 2 例，性的接触（異性間・同性間不明）が 1 例，不明が 4 例であった。主な症状として梅毒性バラ疹，初期硬結，鼠径部リンパ節腫脹（無痛性），硬性下疳等がみられた。

n) 播種性クリプトコックス症

Disseminated cryptococcosis disease

報告数は 2 例で，宮崎市保健所からの報告であった。年齢別では 60 歳代及び 70 歳代で，主な症状として頭痛，発熱，中枢神経病変，意識障害等

がみられた。

o) 破傷風 Tetanus

報告数は3例で、宮崎市(2例)、日南(1例)保健所からの報告であった。年齢別では30歳代、50歳代及び80歳代であった。主な症状として筋肉のこわばり、開口障害、嚥下障害、発語障害、呼吸困難(痙攣性)等がみられた。

p) 百日咳 Pertussis

報告数は304例、都城(96例)、高鍋(81例)、宮崎市、日向(各46例)保健所からの報告が多く、性別は男性が141例、女性が163例、年齢別では7~14歳が約7割を占めた。ワクチンの接種歴は有りが224例、無しが17例、不明が63例であった。主な症状として持続する咳、夜間の咳き込み、呼吸苦、スタックート、ウープ等がみられた。

q) 風しん Rubella

報告数は2例で、病型はいずれも検査診断例で、都城及び小林保健所からの報告であった。性別は男性、女性各1例で、年齢は30歳代及び40歳代であった。ワクチン接種歴は接種無し及び不明であった。主な症状として発熱、発疹、リンパ節腫脹がみられた。

r) 麻しん Measles

報告数は1例で、病型は修飾麻しん(検査診断例)で、宮崎市保健所からの報告であった。性別は女性、年齢は30歳代で、ワクチン接種歴は不明であった。

2 定点把握対象疾患の発生状況

1) インフルエンザ及び小児科対象疾患

報告総数は45,441人、定点当たりの報告数は1120.8、前年及び過去5年間の平均値(以下、「例年」という。)の約0.8倍、全国の約1.3倍であった。

各疾患の発生状況の概要は表3、経時的発生状況は図1のとおりで、その概略を次に示す。

a) インフルエンザ Influenza

2019/2020年シーズンの報告総数は13,075人、定点当たりの報告数は221.6で、前シーズンの約0.7倍、例年の約0.5倍、全国の約1.1倍であった。流行の時期は例年より早く、2019年第50週(12

月中旬)に定点あたり14.8と流行注意報レベルを超過した。2020年第4週(1月下旬)に定点あたり30.6と流行警報レベル開始基準値を超過しピークを迎えた後、例年より早い第7週(2月中旬)に終息基準値を下回った。今シーズンの流行の中心となったウイルスはAH1pdm09型で、A香港型(AH3)及びB型による患者も確認された。都城(306.7)、延岡(272.6)、小林(239.6)保健所の順に報告が多く、10歳未満が全体の約半数を占めた。

b) R Sウイルス感染症

Respiratory syncytial virus infection

報告総数は2,972人、定点当たりの報告数は82.6で、前年の約1.1倍、例年の約1.3倍、全国の約1.9倍であった。延岡(130.0)、中央(114.0)、日向(98.0)保健所からの報告が多く、2歳以下が全体の89%を占めた。

c) 咽頭結膜熱 Pharyngoconjunctival fever

報告総数は1,677人、定点当たりの報告数は46.6で、前年の約1.2倍、例年の約1.1倍、全国の約2.0倍であった。日南(121.3)、宮崎市(51.0)、都城(45.2)保健所からの報告が多く、1歳から3歳が全体の62%を占めた。

d) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

Group A streptococcal pharyngitis

報告総数は4,973人、定点当たりの報告数は138.1で、前年及び例年の約1.3倍、全国の約1.2倍であった。延岡(185.5)、日南(182.7)、宮崎市(167.4)保健所からの報告が多く、3歳から6歳が全体の55%を占めた。

e) 感染性胃腸炎 Infectious gastroenteritis

報告総数は12,897人、定点当たりの報告数は358.3で、前年及び例年の約0.7倍、全国の約1.4倍であった。小林(664.7)、日南(633.0)、都城(483.8)保健所からの報告が多く、1歳から3歳が全体の41%を占めた。

f) 水痘 Chickenpox

報告総数は701人、定点当たりの報告数は19.5で、前年の約0.9倍、例年の約0.5倍、全国の約1.1倍であった。中央(52.0)、日南(32.7)、宮崎市(25.5)保健所からの報告が多く、4歳から7歳が全体の53%を占めた。

g) 手足口病 Hand, foot and mouth disease

報告総数は 4,123 人, 定点当たりの報告数は 114.5 で, 前年の約 0.7 倍, 例年及び全国の約 0.9 倍であった。中央 (174.0), 延岡 (161.0), 日南 (134.3) 保健所からの報告が多く, 6 ヶ月から 2 歳が全体の 80%を占めた。

h) 伝染性紅斑 Erythema infectiosum

報告総数は 1,431 人, 定点当たりの報告数は 39.8 で, 前年の約 8.5 倍, 例年の 2.6 倍、全国の約 1.2 倍であった。延岡 (73.3), 日南 (66.0), 宮崎市 (48.3) 保健所からの報告が多く, 3 歳から 6 歳が全体の 62%を占めた。

i) 突発性発しん Exanthem subitum

報告総数は 1,338 人, 定点当たりの報告数は 37.2 で, 前年の約 0.9 倍, 例年の約 0.8 倍, 全国の約 1.8 倍であった。延岡 (58.0), 日南 (43.7), 宮崎市 (40.9) 保健所からの報告が多く, 6 ヶ月から 1 歳が全体の 91%を占めた。

j) ヘルパンギーナ Herpangina

報告総数は 2,075 人, 定点当たりの報告数は 57.6 で, 前年の約 1.9 倍, 例年の約 1.1 倍, 全国の 1.9 倍であった。延岡 (138.5), 都城 (67.0), 日向 (60.5) 保健所からの報告が多く, 6 ヶ月から 2 歳が全体の 76%を占めた。

k) 流行性耳下腺炎 Mumps

報告総数は 179 人, 定点当たりの報告数は 5.0 で, 前年及び例年の約 0.1 倍, 全国と同程度であった。中央 (14.0), 延岡 (12.0), 日向 (6.8) 保健所からの報告が多く, 3 歳から 7 歳が全体の 67%を占めた。

2) 眼科及び基幹定点対象疾患

眼科定点対象疾患の報告総数は 616 人, 定点当たりの報告数は 102.7 で, 前年及び例年の約 0.7 倍, 全国の約 3.0 倍であった。

基幹定点対象疾患の報告総数は 42 人, 定点当たりの報告数は 6.0 で, 前年の約 0.3 倍, 例年及び全国の 0.2 倍であった。

a) 急性出血性結膜炎

Acute hemorrhagic conjunctivitis

報告総数は 1 人, 定点当たりの報告数は 0.17 であった。前年と同率, 例年の約 0.2 倍, 全国の

約 0.3 倍であった。年齢は 50 歳代であった。

b) 流行性角結膜炎

Epidemic keratoconjunctivitis

報告総数は 615 人, 定点当たりの報告数は 102.5 で, 前年及び例年の約 0.7 倍, 全国の約 3.1 倍であった。年齢別では 10 歳未満が全体の 29%を占めた。

c) 細菌性髄膜炎 Bacterial meningitis

報告はなかった。

d) 無菌性髄膜炎 Aseptic meningitis

報告総数は 1 人, 定点当たりの報告数は 0.14 で, 前年は報告がなく, 例年及び全国の約 0.1 倍であった。年齢は 5~9 歳で, 原因菌は不明であった。

e) マイコプラズマ肺炎

Mycoplasmal pneumonia

報告総数は 13 人, 定点当たりの報告数は 1.9 で, 前年の約 2.6 倍, 例年及び全国の約 0.2 倍であった。0~4 歳が 7 例, 5~9 歳, 10 歳代が各 3 例であった。

f) クラミジア肺炎 Chlamydial pneumonia

報告総数は 1 人, 定点当たりの報告数は 0.14 で, 前年は報告がなく, 例年の約 1.7 倍, 全国の約 0.7 倍であった。患者は 70 歳代であった。

g) 感染性胃腸炎 (ロタウイルスに限る)

Infectious gastroenteritis (only by Rotavirus)

報告総数は 27 人, 定点当たりの報告数は 3.9 で, 前年の約 0.2 倍, 例年の約 0.3 倍, 全国の約 0.4 倍であった。宮崎市 (12.0), 日南 (11.0) 保健所からの報告が多く, 10 歳未満が全体の 93%を占めた。

3) 月報告対象疾患

性感染症の報告総数は 377 人, 定点当たりの報告数は 29.0 で, 前年の約 1.1 倍, 例年の約 0.9 倍, 全国の約 0.6 倍であった。

薬剤耐性菌感染症の報告総数は 187 人, 定点当たりの報告数は 26.7 で, 前年の約 0.9 倍, 例年の約 0.8 倍, 全国の約 0.7 倍であった。

a) 性器クラミジア感染症

Genital chlamydial infection

報告総数は 245 人、定点当たりの報告数は 18.8 で、前年と同程度、例年の約 0.9 倍、全国の約 0.7 倍であった。都城 (29.0)、延岡 (25.5)、宮崎市 (21.0) 保健所からの報告が多かった。性別は男性が約 4 割、女性が約 6 割で、年齢別では 20 歳代が全体の 53% を占めた。

b) 性器ヘルペスウイルス感染症

Genital herpetic infection

報告総数は 51 人、定点当たりの報告数は 3.9 で、前年の 0.9 倍、例年の約 1.1 倍、全国の約 0.4 倍であった。高鍋、日向 (10.0) 保健所からの報告が多かった。性別は男性が約 2 割、女性が約 8 割で、年齢別では 20 歳代から 40 歳代が全体の 75% を占めた。

c) 尖圭コンジローマ *Condyloma acuminatum*

報告総数は 15 人、定点当たりの報告数は 1.2 で、前年の約 1.4 倍、例年の約 0.7 倍、全国の約 0.2 倍であった。宮崎市 (2.8)、高鍋 (1.5)、延岡 (0.5) 保健所からの報告であった。性別は男性が約 3 割、女性が約 7 割で、20 歳代が全体の 40% を占めた。

d) 淋菌感染症 *Gonorrhoea*

報告総数は 66 人、定点当たりの報告数は 5.1 で、前年の約 1.6 倍、例年の約 0.9 倍、全国の約 0.6 倍であった。都城 (12.0)、日南 (10.0)、高鍋 (5.5) 保健所からの報告が多かった。性別は男性が約 7 割、女性が約 3 割で、20 歳代が全体の 53% を占めた。

e) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* infection

報告総数は 186 人、定点当たりの報告数は 26.6 で、前年と同程度、例年及び全国の約 0.8 倍であった。70 歳以上が全体の 61% を占めた。

f) ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

Penicillin-resistant *Streptococcus pneumoniae* infection

報告総数は 1 人、定点当たりの報告数は 0.14 で、前年及び例年の約 0.1 倍、全国の約 0.04 倍であった。年齢は 70 歳代であった。

g) 薬剤耐性緑膿菌感染症

Multidrug-resistant *Pseudomonas aeruginosa* infection

報告はなかった。

まとめと考察

全数把握対象疾患のうち、結核は 2014 年以降やや減少傾向であったが、2019 年は増加傾向となった。中央保健所管内を除く地域の、0 歳から 90 歳代まで幅広い年齢層で報告され、病型で比較すると、昨年に比べ無症状病原体保有者が多い傾向にあった。年齢では 70 歳代以上が全体の約半数を占めた。劇症型溶血性レンサ球菌感染症、梅毒はいずれも過去最多の報告数である。特に梅毒は、全国的にも年々増加傾向であり、今後も動向に注意する必要がある。また、県内初のクリプトスポリジウム症の患者が報告され、2009 年以来となる腸チフスの患者も報告された。

定点対象疾患のインフルエンザ及び小児科対象疾患の定点当たりの報告数は、前年及び例年の約 0.8 倍、全国の約 1.3 倍であった。また伝染性紅斑は前年の約 8.6 倍となり、例年及び全国と比べ多く、流行の年となった。

眼科定点対象疾患のうち、そのほとんどの報告数を占める流行性角結膜炎は、前年及び例年の約 0.7 倍と減少したが、全国の約 3.1 倍と多く、例年通りの傾向であった。

基幹定点対象疾患の報告数は前年の約 0.3 倍、例年及び全国の約 0.2 倍であった。また、対象疾患の中で、年々増加傾向であった感染性胃腸炎(ロタウイルス)についても本年は減少傾向となった。

月報告対象疾患の性感染症の報告数は前年の約 1.1 倍、例年の約 0.9 倍、全国の約 0.6 倍であった。性器ヘルペスウイルス感染症は 20~40 歳代に多く認められ、それ以外の疾患は 20 歳代に多く認められた。また薬剤耐性菌感染症は前年の約 0.9 倍、例年の約 0.8 倍、全国の約 0.7 倍であった。

本調査結果から、疾患によって流行発生時期や地域差、年齢差等があることが分かった。今後も引き続き、感染症情報の収集と解析を的確・迅速に行い、感染症の発生動向に細心の注意を払うと

ともに、幅広い世代に適切な情報の提供と感染予防の啓発を行っていく必要があると考えられる。

備考)

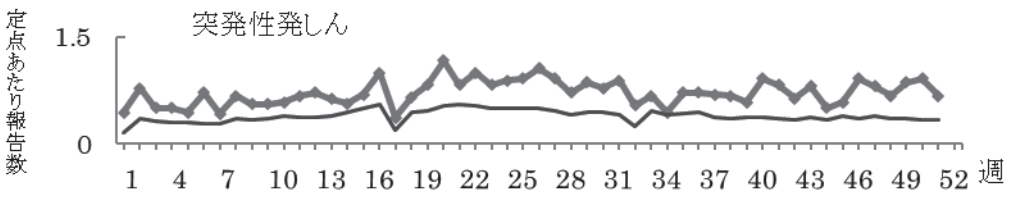
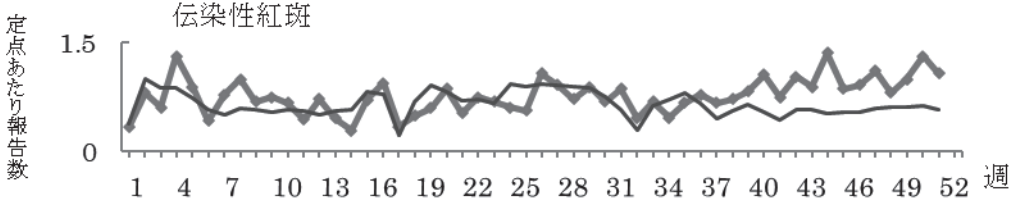
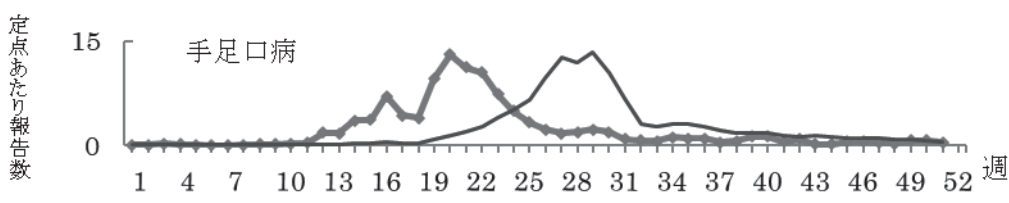
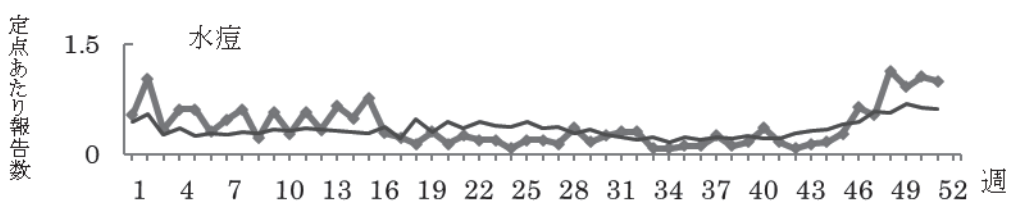
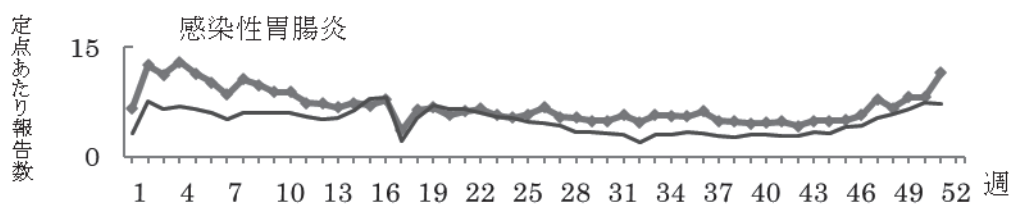
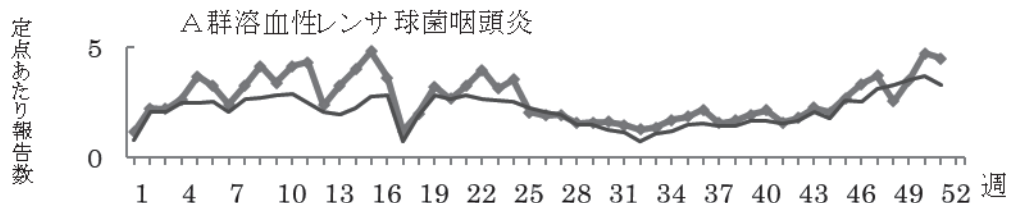
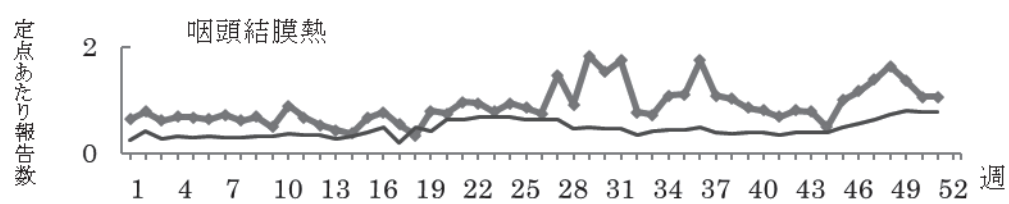
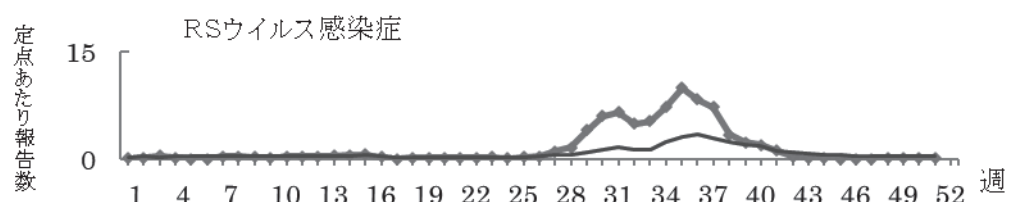
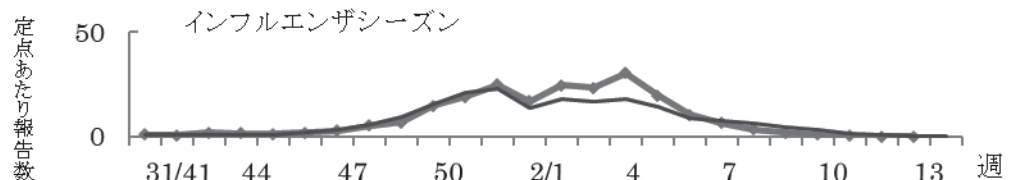
感染症発生動向調査事業は、患者情報と病原体情報から構成されており、当研究所の微生物部では病原体情報を得ている。

文献

- 1) 厚生省保健医療局長通知：感染症の予防及び感染症患者に対する医療に関する法律の施行に伴う感染症発生動向調査事業の実施について，平成 11 年 3 月 19 日健医発第 458 号.

表3 定点把握対象疾患の発生状況の概要（宮崎県，2019年）

疾患名	報告総数	定点あたり 報告数	年齢群別報告数の割合		昨年比 (県内2018年) (%)	過去5年間の 平均との比 (%)	全国比 (2019年) (%)
			好発年齢群	報告総数に 占める割合 (%)			
インフルエンザシーズン	13,075	221.6	10歳未満	53	71	54	112
RSウイルス感染症	2,972	82.6	2歳以下	89	114	126	186
咽頭結膜熱	1,677	46.6	1歳～3歳	62	120	112	195
A群溶血性 レンサ球菌咽頭炎	4,973	138.1	3歳～6歳	55	127	129	123
感染性胃腸炎	12,897	358.3	1歳～3歳	41	70	70	140
水痘	701	19.5	4歳～7歳	53	92	51	108
手足口病	4,123	114.5	6ヵ月～2歳	80	73	90	90
伝染性紅斑	1,431	39.8	3歳～6歳	62	862	258	116
突発性発しん	1,338	37.2	6ヶ月～1歳	91	86	78	182
ヘルパンギーナ	2,075	57.6	6ヶ月～2歳	76	186	112	187
流行性耳下腺炎	179	5.0	3歳～7歳	67	14	12	104
急性出血性結膜炎	1	0.2	50歳代	100	100	23	34
流行性角結膜炎	615	102.5	10歳未満	29	67	74	308
細菌性髄膜炎	0	0.0	—	—	0	0	0
無菌性髄膜炎	1	0.1	5～9歳	100	—	8	8
マイコプラズマ肺炎	13	1.9	20歳未満	100	260	17	15
クラミジア肺炎	1	0.1	70歳以上	100	—	167	71
感染性胃腸炎 (ロタウイルスに限る)	27	3.9	10歳未満	93	17	30	39
性器クラミジア感染症	245	18.8	20歳代	53	105	95	68
性器 ヘルペスウイルス感染症	51	3.9	20歳代～40歳代	75	88	106	41
尖圭コンジローマ	15	1.2	20歳代	40	136	67	18
淋菌感染症	66	5.1	20歳代	53	165	91	61
メチシリン耐性 黄色ブドウ球菌感染症	186	26.6	70歳以上	61	99	82	79
ペニシリン耐性 肺炎球菌感染症	1	0.1	70歳以上	100	9	11	4
薬剤耐性緑膿菌感染症	0	0.0	—	—	—	0	0



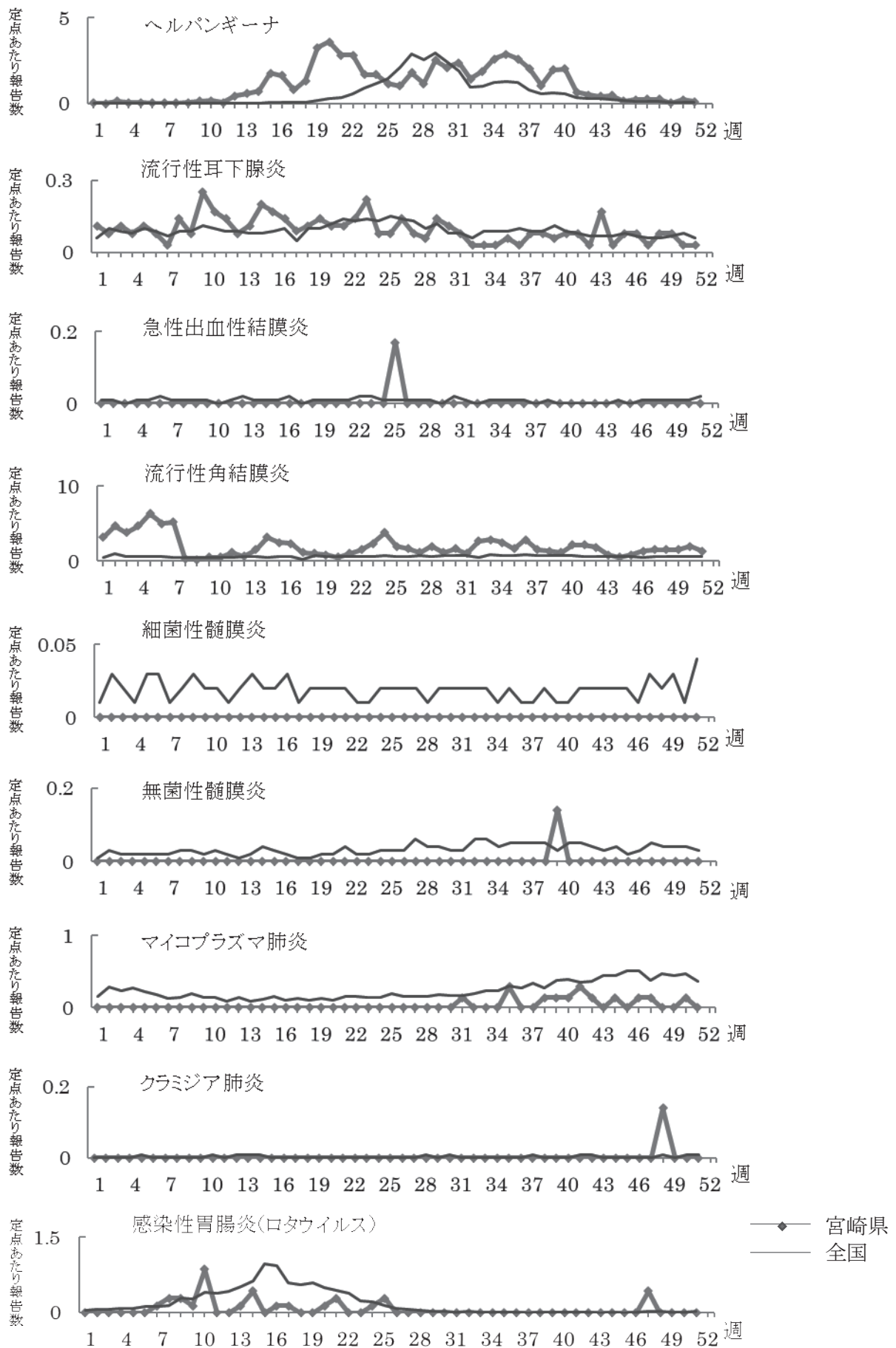


図1 定点把握対象疾患（週報告対象）の定点あたり報告数の週推移（経時発生状況）